
領域名：基礎看護

報告者：山川和歌子

教育及び実践の課題

COVID-19の影響により、本学では2020年度から遠隔授業が導入された。本学では、その前年度から学生へのパソコン貸与が開始されており、さらに、遠隔授業開始後から学内での遠隔授業の受講許可やポケット Wi-Fi の貸し出しなど、遠隔授業を受ける環境への配慮は行われてきた。しかしながら、突如、遠隔授業を受けることになった学生の経験については十分に把握できておらず、十分な配慮がされてきたか検討する必要があると考えられた。COVID-19の影響を受けた教育も3年目となり、突如遠隔教育へ移行した学生の経験を考慮し、これからの支援を検討するために、今回の文献を選択した。

活用した論文の概要

アメリカ太平洋岸北西部にある学士課程の3年次と4年次の11名を対象に、免許取得前の学士課程の看護学生への遠隔学習への移行の経験を調査する研究である。学生たちは、遠隔学習への移行の際に、テクノロジーの利用について【技術的な課題】、学生同士や教授との関係など【学術的関係の変化】、家族との関係や学習環境の変化、経済的な打撃などによる【役割のストレスと緊張】、遠隔学習への移行により対処能力と創造性を高める【レジリエンス】という4つのテーマの経験をしていた。

教育及び実践への活用

本学の学生も、Sharonら(2021)の研究結果と同様に、COVID-19の影響で学生同士や教員との関わり、学習環境の変化によるストレスを感じていると考えられ、遠隔授業の中でも学生が意見を表出しやすい方法や、看護技術の経験を補う工夫など、遠隔学習への移行が促進される関わりが必要だと考えられた。そこで、2021年度の生活援助・療養援助技術Iが遠隔授業となった際には、教員が学生の指示を受けて寝衣交換を実施する、アバター方式の学習方法を取り入れた。その方法を導入した理由は、遠隔授業の中で学生同士の交流の場を作ることと、学生の学習環境に配慮しつつ看護技術の経験を促すためだった。オンライン上では、大人数の中で学生が発言することは難しい。そこで、5~6人のグループごとの小部屋を設け、その中でアバターへの指示を出すための作戦を話し合い、その後グループメンバーで協力しながらアバターへ指示を出してもらった。アバターへ指示を出すという目的があること、グループ単位の少人数で話をする場であったことから学生達はグループで活発に意見交換しており、それが学生同士の交流の場になったと考えている。また、自宅という学習環境では、看護技術のための物品や場所を各自で確保することが難しい。アバター方式はオンライン上での看護技術の疑似体験となり、看護師の動作をイメージしやすく、看護技術の経験への不安の軽減につながったと考えている。今回取り入れた学習方法は、学生同士の関係構築や、無理なく看護技術を学習することに繋がり、本学の学生の遠隔学習への移行を促進する関わりになったと考えられる。

参考文献

Sharon Wallace, Monika S. Schuler, Michelle Kaulback, et. al. (2021). Nursing student experiences of remote learning during the COVID-19 pandemic. Nursing Forum, 1-7.
